

粉 瘤 ニ 就 テ

岡山醫科大學皮膚科泌尿器科教室 (主任皆見教授)

藤 原 皓

緒 言

前回ニ於テ毛嚢々腫症ノ臨牀的竝ニ組織的所見ヲ述べ粉瘤トノ鑑別ニ就テ諸家ノ意見及ビ余ノ見解ヲ擧ゲタリ。即チ臨牀的ニハ往々毛嚢々腫ト粉瘤トノ區別至難ナル場合アルモノナリ。

今回ハ眞ニ粉瘤ト稱スベキモノニ就テ孰レモ連續切片ニテ檢索シソノ所見ヲ茲ニ發表セント欲ス。素ヨリ粉瘤ニ就テハ可ナリ詳細ナル報告アルモ、余ノ檢査成績ヲ述ブルモ敢テ贅言ニハ非ザルベシ。

症 例

第1例 丹生 56歳 女

病歴 約10箇月前右眼瞼ニ腫物ヲ生ジ近來特ニ増大ス。自覺症ナシ。

現症 右眼瞼上部ニ豌豆大ノ腫瘍アリテ半球狀ニ隆起シ壓痛ナシ。表面色澤尋常ニシテ壓迫ニヨリ内容ヲ洩ラサズ。粉瘤ノ診斷ノ下ニ之ヲ剔出ス。

組織的所見

粉瘤尙ホ現レザル部分ニテ眞皮ノ深層ニ夥シキ淋巴細胞及ビ「エオジン」嗜好性細胞ガ集團ヲナセル中ニ少數ノ中性多核白血球ヲ混ズ。

後上皮細胞現レ漸次ソノ内腔ヲ生ジテ頽敗セル上皮細胞、層狀ノ不定形物質ヲ充シ壁ノ上皮細胞ハ數層ナルモソノ排列不規則ニシテ、ソノ中及ビ内腔内ニ「エオジン」嗜好性及ビ中性多核白血球多數侵入ス。毛髮ノ斷面ハ缺如ス。後ニ内腔ハ非常ニ大トナル。粉瘤ノ周圍ニ1箇所大小ノ巨大細胞4—5箇集團セル部アリ。ソノ核ハ周縁ニ列ブ。全粉瘤ノ追視中5—6箇所ニ斯ル巨大細胞ノ集團ヲ認ム。

粉瘤竝ニ細胞浸潤ノ周圍ヲ結締織ガ輪狀ニ圍ム。ソノ周ノ血管可ナリ擴大ス。

壁ニハ突起ナク又脂腺或ハ毛髮ト連絡ナク表面トモ交通セズ。

壁ノ上皮間ニ細胞間橋(棘)ヲ見ル所アリ、又不明瞭ノ部モ多シ。顆粒層モヨク發達セル所又不明瞭ノ所アリ。

要スルニ此粉瘤ハ外表ニ通ゼズシテ大ナル内壁ヲ有シ壁ノ上皮細胞ニ突起ナシ。基底ノ層ト結締織トノ間ハ一般ニ平滑ナリ。之ニ炎衝ヲ起セルニテ浸潤細胞ハ周圍ヨリ内腔ニ入り込ム像ヲ呈ス。且異物性巨大細胞ノ發生アリシモノナリ。

第2例 四宮 21歳 男

病歴 約5年來顔面ニ腫瘍アリテ漸次腫大ノ傾向アリ。自覺症ナシ。

現症 右眼外側ニ1箇ノ胡桃大ノ腫物アリ。半球狀ニ隆起シ、表面ニ著色ナク、皮膚ト癒着シ、下方深部

トハ移動性ナリ。硬度彈性強韌ニシテ壓痛ナシ。

表皮ノ1部ヲ附セルママ之ヲ剔出シ「フォルマリン」固定「パラフィン」連續切片ニ製ス。

組織的所見

粉瘤ノ尙現ハレザル部ニ於テ真皮ノ深層、皮下組織ノ附近ニ僅少ノ上皮細胞ト多核白血球並ニ淋巴球集マレリ。

上皮細胞増加スルト共ニ核ガ邊緣ニ並ベル(中心ニ存スルモノモアレド多クハ邊緣ニ存ス)巨大細胞夥シク現レ、中ニ褐色ノ色素顆粒ヲ含メルモノアリ。此色素ハ鐵反應陰性ニテ「オキシフル」20時間ニテ漂白セラルル故ヲ以テ「メラニン」ナリ。此顆粒ハ巨大細胞外ニモ存セリ。

後中央ノ細胞ノ排列ハ益々不規則トナリ遂ニ不定形ノ紅色「エオジン」ノ物質トナリ中ニ多核白血球モ混ズ。ソノ周圍ニ上皮細胞、巨大細胞、組織球、淋巴細胞、多核白血球等多ク始メハ周圍ニ上皮細胞列ナキモ後ニハ内腔壁ニ上皮細胞ノ數層ガ輪狀ヲナス。此壁ノ上皮細胞ノ互ノ排列ハ尙ホ不規則ナリ。後規正ニ列ベル部モアレド、亦斯ル上皮細胞列ナクシテ唯不規則ニ並ベル細胞及ビ巨大細胞ガ集マリテ壁ヲ形成セル所モアリ。又後者ノミニテ壁ニ上皮細胞ナキ部アリ。内容ノ1部石灰化セル部アリ。壁ノ上皮細胞規正ナル部ノ角質ハ求心的ニ列ベルモ巨大細胞多キ所ハ斷片トナリ不規則ナリ。内容ニハ毛髮ナク巨大細胞剝離シテ内容中ニ混ゼルモノアリ。壁ノ上皮細胞稍々規正ナル所ニハ内腔ノ方ニ「ケラトヒアリン」アリ。又ソノ内方ニ角層ヲ有スル所アリ。加之1箇所ニハ可ナリ著シキ不全角化アリ。壁ノ規正ナル部ニハ巨大細胞ナクソノ外側ニ淋巴球及ビ多核白血球等モ殆ド缺如ス。又斯ル所ニハ基底層ニ接シテ色素細胞ガ2—3箇宛列ベル所アリ。巨大細胞群ノ下層ニ之ト核ノ性状(大サ明ルサ)ヲ同ジセル細胞可ナリ浸潤セリ。是レ即チ組織球ナリ。又稍々規正ニ列ベル上皮細胞ト巨大細胞列トノ境界ニ於テ上皮細胞ノ下方ニ巨大細胞可ナリ存シ、後、前者消失シテ後者ノミトナル所アリ。

組織球ヨリ、異物性巨大細胞ヲ生ズルナリ。巨大細胞ハ粉瘤ノ深層ノ壁(即チ皮下組織ノ方ニ)ニ多シ。壁ノ時ニハ多少乳頭狀ニ凸凹ヲ示セルモノアリ。

粉瘤全體ヲ結締組織ガ輪狀ニ圍ム。ソノ周圍ノ血管多少擴張セリ。

壁ノ上皮細胞ノ周ニ淋巴球ノ群集セル所アリ。上皮細胞内ヘモ入り、多少ノ多核白血球モ侵入セリ。

「サフラン」及ビ「ビクリン」酸染色ニテ内容ガ黃色ノモノモアレド、多クハ紅色ニ染レリ。是レ角質ナルヲ示スモノト信ズ。遂ニ内容ハ層狀ノ不定形物質ノミトナル。

壁ノ上皮ニハ突起ナク又外表ト通ゼズ。

彈力纖維ハ壁ノ周ノ結締織内ニハ多少減少ス。

連續追視スルニ内腔漸次縮小シ巨大細胞失セテ壁ハ規正トリ、内腔ニ向ヒテ上皮細胞剝離ス。基底層ニ接シテ夥シキ淋巴細胞及ビ組織球ガ圍ミ後ニハ内腔モ上皮細胞モ初メノ狀態ノ如ク經過シテ消失ス。

即チ此粉瘤ハ真皮ノ深層ニアリテ壁モ内腔モ粉瘤ノモノナリ。壁ハ1部巨大細胞群ニ依テ代償セラレ、粉瘤ハ毛囊及ビ表面ト關係ナシ。

巨大細胞ハ組織球ヨリ生ゼルモノノ如ク、異物性巨大細胞トシテ發生セルナリ。巨大細胞群ノ爲ニ上皮細胞ハ破壊セラレテ前者ニ代償セラル。初メノ切片ニ於テ巨大細胞群ノミノ所ハ粉瘤壁ノ切線的ニ切レシモノナリ。

第3例 峰谷 25歳 男

病歴 4年前ヨリ陰囊及ビ肛門部ニ軽度ノ痒痒アル發疹アリ。

現症 陰囊前面中央ニ豌豆大ノ腫瘍アリ。色澤黃色光輝アリ。半球狀ニ皮膚面ニ隆起シ、皮膚トハ固定性ナルモ基底部分ハ移動性ナリ。尙ホ陰囊全體及ビ肛門附近ニ多數ノ堤防狀ノ周縁ヲ有スル豌豆大ノ皮疹アリ。(是レ即チ所謂汗孔角化症ニシテソノ組織的所見ニ就テハ既ニ報告セシ所ナリ。) 軽度ノ痒痒ヲ訴ヘシモノハコノ輪狀ノ疹ニシテ黃色ノ腫瘍ハ何等自覺的症候ナク、指頭ニテ壓スルモ内容ヲ出サズ。

組織的所見

上記黃色ノ腫瘍ヲ皮膚ト共ニ剔出シ連續切片ニ作ル。

コノ腫瘍ハ粉瘤ニシテ内容ハ層狀ヲナセル角質様物質ニ充チ毛髮ノ断面ハ含マズ。内容ノ1部ニ石灰化セルモノアリ。壁ノ結締織内ニモ諸處ニ小ナル石灰化物ヲ見ル。壁ト結締織ノ境界ハ平滑ナル圓形ヲナスモ所ニヨリテハ稍々不規則ニシテ乳頭ヲ偲バシムルモノアリ。然レ共毛囊様ノ突起ハ何處ニモ見ズ。

粉瘤ノ内腔ハ可ナリ大ナリ。中央ニ「ケラトヒアリン」列ビ數層ノ上皮細胞之ヲ圍ム。コノ上皮細胞間ニ棘ハ不明ナリ。周圍ニ於ケル結締織ハ染色不良ニシテ鬆粗ナリ。尙ホ更ニ進ミテ、内腔小トナリ後上皮モ消失シ鬆粗ノ結締織纖維(核少シ)ノ境界不明ノモノ排列シテ1群ヲナス。コノ囊腫ハ表面ト通ゼズ。

第4例 某 45歳 男

病歴 數年前ヨリ腰部ニ腫物ヲ生ジ自覺症ナキモ漸次増大シ小兒手拳大ニ及ブ(本例ハ津田外科ヨリ分與セラレシ者ナリ)。

現症 腰部下方臀部ニ近ク小兒手拳大ノ腫瘍アリテ皮膚面ヨリ高ク隆起シ、硬度強韌ニシテ表面皮膚ニ異狀ナシ。壓痛ナシ。粉瘤ノ診斷ニテ皮膚ト共ニ剔出ス。

組織的所見

皮下ニアリテ5—6層ノ上皮細胞ヨリナル。此細胞ハ扁平トナリ細胞境界不明ニシテ内腔ニ向ヒ「ケラトヒアリン」アリ。基底細胞モ扁平ナリ。

此切片ハ壁ノ1部ナルモ、其處ニ乳頭ヲ見ズ、平滑ナリ。

内容ハ「ズダン」IIIニテ黃紅色不定形ノ物質中ニ「ヒヨロステリン」ノ結晶アリ。脂腺或ハ皮下脂肪組織ノモノニ比シ淡キモ手拳或ハ足蹠ノ角質ヲ「ズダン」IIIニテ染メシニ比シ色濃シ。毛囊々腫ノモノヨリ黃色調薄キモ、又殆ド類似ノモノアリ。コノ間ニ不定形黃色ノモノアリテ粟粒腫ノ脂肪ニ類セル色調ヲ有ス。是レハ小ナル粉瘤ニ於テモ同様ナリ。本標本ノ如キ大ナル粉瘤ニ於テハ内容ノ中央ハ不定形液狀ニシテ黃紅色ニ染リ「ヒヨロステリン」ヲ有セザルモ、ソノ邊縁ニ於テハ「ヒヨロステリン」結晶ヲ見ル。

「オスミウム」染色ニテハ皮様囊腫ト同様ニ黑色ノ顆粒多ク、中ニハ液狀ノモノガ瀰漫性ニ淡黑色ニナルアリ。ソノ他ニ黃色ニ染マレル板狀ノモノアリ。ソノ中ニ黒キ顆粒ヲ含メルモアリ。

第5例 櫻田 15歳 女

病歴 生後間モナク前額右側眉毛ニ近ク1箇ノ腫瘍ヲ生ジ、身體ノ成長ニ應ジテ次第ニ大トナレルモ腫瘍自身ハ生長セザリシ如シ。自覺症狀ナシ。

現症 右眉毛外側ニ強韌ナル硬度ヲ有スル示指頭大ノ腫瘍アリ。基底ハ固ク癒着スルモ皮膚トハ移動性ナリ。皮膚尋常ナリ。皮様囊腫ノ診斷ノ下ニ之ヲ剔出セシガ基底ハ骨膜ト固ク癒着シ剝離ニ稍々困難ヲ感

ゼリ。内容黄白色、脂様ノ光澤ヲ有シ毛髮多ク混在セリ。内容ヲ殘セルママ之ヲ連續切片ニ切ル。

組織的所見

壁ハ全ク不規則ナル凸凹アリテ乳頭形成著明ナリ。壁ノ上皮細胞ハ表皮ニ等シクシテ棘ヲ有シ數層ヲナシ内腔ニ接シテ「ケラトヒアリン」ヲ見ル。又萎縮シテ2—3層ノ上皮細胞ヲナス所アリ。壁ニ夥シキ脂腺及ビ毛髮アリ。脂腺ガ獨立シテ直接内腔ニ注グ所アリ。壁ニ接シテ汗腺體モアリ。又壁ノ1部ニハ僅少ノ巨大細胞(巨大細胞可ナリ多キ所モアリ)及ビ組織球、多核白血球等アリ。所ニ依テハ壁ガ巨大細胞ノミヨリ成レルアリ。

内容ニハ角質細胞ト數多ノ毛髮アリ。壁ガ乳頭狀ニ内腔中ニ隆起セシ所アリ。

即チ壁ノ構造ハ粉瘤ト異リ乳頭、脂腺、毛髮、汗腺等アリテ非常ニ複雑ニシテ定形的ノ皮様囊腫ナリ。巨大細胞ガ壁ニアルハ粉瘤(第2例)ノ場合ト等シク組織球ヨリ生ゼル異物性巨大細胞ニテ上皮細胞ノ1部ヲ代償セルモノナラン。

尙ホ脂肪染色ニ於テ「ズタン」IIIニテハ内容ハ粉瘤ノ内容ト同ジク、不定形ノ黄紅色ノ液狀ヲナスモ、毛髮多ク「ヒヨロステリン」ノ結晶ハ見ザリキ。「オスミウス」染色ニテモ粉瘤ノ内容ト全く同様ノ所見ナリ。

考 按

粉瘤ニ就テハ Franke 氏ノ詳細ナル研究アリ。彼以前ニ於テ、粉瘤ハ脂腺ノ滲溜囊腫ト考ヘシ者多キモ、中ニハ眞ノ腫瘍ナリト云フ者モアリキ。Franke 氏ハ夥シキ標本ヲ檢索セル後、本腫瘍ハ皮下組織或ハ眞皮ノ深層ニ發生シ、上皮細胞ノ迷芽ニ歸スベク、之ヲ Epidermoid (表皮囊腫)ト稱セリ。Török, Unna 氏等モ皮下組織ニ存在スルト云フ。

即チ其位置ハ皮下組織ニ多キモ余等ノ標本ニテハ眞皮ノ下層ニ占居スルモノモアリ。Franke 氏モ顔面ニアルモノハツノ皮膚薄キ爲皮下組織ニ無キモノアリト云ヘリ。毛囊々腫ハ眞皮上層ニ在ルモ發育ノ結果下方ニ移動スルモノアリテ、位置ニヨリテ兩者ヲ識別スルノ難キモノアレド、一般ニ粉瘤ハ毛囊々腫ヨリモ深部ニ在ルヲ通則トスルモノノ如シ。

粉瘤壁ノ構造ハ表皮ト同様ニシテ小ナルハ充實性ナルモノアランモ (Franke 氏) 吾人ノ經驗スルハ殆ド常ニ内容ヲ有スルモノナリ。壁ノ細胞ハ基底層ヨリ顆粒層ニ及ビ全體ハ數層ノ細胞列ヨリ成ル。Franke 氏ハ棘細胞ノ棘ハ小ナル腫瘍ニハ存スルモ大ナルモノニハ稀ナリト云フ。余ノ標本ニ於テハ棘ヲ認ムルモノモアレド一般ニ甚ダ至難ナリキ。是レ腫瘍擴大ノ結果細胞ガ壓迫サレテ細胞間腔狹隘トナリシ爲ニテ、遂ニ棘ノ識別困難トナルハ當然ナリ。

上皮細胞列ト結締織トノ間ニ乳頭ヲ見ルト Franke 氏ガ唱ヘ、Török 氏モ之ニ贊セシガ、發見シ難キモノモアリト云ヘリ。Unna 氏ハ乳頭ハ必ズシモ必要ナラズトシ、Simon 氏ノ例ハ乳頭ヲ缺如セリ。

余モ乳頭様凹凸ヲ多少認メタルモノアルモ甚ダ痕跡的ノモノ多ク、之ヲ以テ粉瘤ノ標識トナスハ無理ナル感ナキニ非ズ。

粉瘤ハ毛髮及ビ脂腺ト關係ナキハ Franke, Simon 氏等ノ述ブル所ニシテ余モ之ヲ承認ス。

壁ノ毛嚢ト連絡アルハ毛嚢々腫ニ屬スベキナリ。Török 氏ハ粉瘤壁ト毛嚢トノ連絡アルヲ舉ゲシモ是レ毛嚢々腫ヲ見タルモノナラン。

腫瘍ノ周ニ結締織ガ輪狀ニ配列スルハ有リ得ベキ事ニテ、腫瘍ノ發育ニ隨ヒ結締織纖維ガ壓迫サレテ斯ル配列ヲ採ルハ當然ナリ。故ニ腫瘍ノ大小ニ依リ此纖維ノ厚薄ヲ見ルベキナリ。

壁ノ周圍ニ巨大細胞アルコトアリテ角質或ハ血液等ヲ吸收スルナラント Franke 氏ハ云ヘリ。余モ第2例ニ於テハ夥シキ巨大細胞ヲ認メ、加之或所ニハ上皮細胞ニ代リテ粉瘤壁ガ巨大細胞列ヨリ成レルアリ。ソノ周圍ノ結締織内ニ組織球ノ浸潤モアリテ、恐ラク此巨大細胞ハ組織球ヨリ成レル異物性巨大細胞ニシテ、角質等ヲ吸收セントスルモノナラン。ソノ細胞体内ニ「メラニン」ヲ含有セリ。ソノ原因ハ角質ヨリ發生セリヤ否ヤハ不明ナリ。將來ノ研究ニ俟ツ。

粉瘤ハ外皮ニ通ゼズ。之ト通ズルハ寧ロ毛嚢々腫ニ編入スベキナリ。Török 氏ハ粉瘤ガ表面ト通ズルアリト云ヘルモ毛嚢々腫ヲ混同セルモノナラン。Franke, Unna 氏等モ外部ニ連續ナキヲ説ケリ。

内容ガ主トシテ角質ヨリ成ルハ一般ニ認メラルル所ニシテ、求心的ニ配列シ時ニ石灰化セルアリ (Franke, Török 氏等)。Török 氏ハ「サフラニン」ニ赤染スルハ「エレイヂン」ナラント云ヘルモ、余ノ檢索ニテハ種々ノ對照染色ニ據ルニ、是レハ寧ロ角質ニ由ルト思考ス。

Franke 氏ハ、中ニ脂肪或ハ「ヒヨレステリン」ハ缺如スルモ、古キモノニハ之ヲ見ルコトアリテ上皮細胞或ハ角質ヨリ生ゼルモノナラント云フ。Török 氏ハ「ヒヨレステリン」ヲ見、脂肪ハ存スルモノト然ラザルモノトアリテ寧ロ除外例トシテ脂肪ヲ見ル程度トセリ。Unna 氏ハ「ヒヨレステリン」ハ存在シ、古キ粉瘤ニハ特ニ増加ス。脂肪ハ含マズシテ粥狀ノ物質ハ角質ノ變性物ニ歸スベシトシ、且内容ハ細菌ヲ見ズト説ケリ。

内容ニ就テハ余ノ檢索ニモ大體之ヲ認ム。「ヒヨレステリン」結晶ハ割合ニ小ナル新シキモノニハ缺如スルモノ多ク、大ニシテ古キモノニハ多キガ如シ。脂肪ニ就テハ割合ニ少キガ如キモ古ク大ナルモノニハ可ナリ多シ。「ズダン」III ニテ之ヲ證スルヲ得。ソノ成因ハ、角質等ヨリ生ズルモノノ如シ。

又一般ニ粉瘤ノ内容ニハ毛髮ヲ含マズ。是レ毛嚢等ト關聯ナキニヨルモノニテ、若シ内容ニ毛髮アラバ寧ロ毛嚢々腫ニ入ルベキナリ。

粉瘤ノ發生スル部位ハ頭部ニ最も多シト (Franke, Unna, Frei 氏等) 云ハルルモ、他ノ部位ニモ發生シ得ルモノニシテ此事ハ前回毛嚢々腫ノ報告ニ於テモ述ベタリ。且 Simon 氏ハ腰部ニモ多シト云ヘリ。

粉瘤ノ發生ハ Franke 氏ハ胎生期ニ上皮芽ノ迷入アルモ發育遲キ爲、通常ハ後ニ發見セラレ、外傷或ハ炎症等ニ因リテ發育速進セラルト云フ。是レハ妥當ナル議論ナルモノノ如シ。Gans 氏ガ毛嚢々腫ハ先天性ナラズシテ 15 歳以前ニハナシトテ暗ニ粉瘤トノ區別ヲ立テントセルモ、吾人ノ經驗スル粉瘤モ春機發動期以後ニ於テ總テノ物が發育盛ナルニ當リテ發見スルコト多シ。

故ニ發育ノ年齢ノミニ依リテ兩者ヲ區別スルハ殆ド不能ナリト思考ス。

粉瘤ト毛嚢々腫トヲ劃然ト區別スレバ前者ハ表皮迷芽ヨリ發生セルモノニシテ多クノ人ハ之ヲ信ズ (Franke, Török, Kyrle 氏等)。

上皮嚢腫 (Epitheleyste) ハ後天的ニ皮膚障害ノ爲ニ表皮ガ陥入シテ生ゼル表皮嚢腫ニシテ、先天的ニ生ゼル粉瘤ト同種ニ入ルベキモノナルハ諸家モ之ヲ説ケリ (Franke, Simon 氏等)。然ルニ Török 氏ハ粉瘤ノ一部ニハ脂腺ノ滯溜嚢腫モアルベシト云ヒ、Lexer 氏ノ書ニハ最新版ニ於テ毛粉瘤ハ脂腺排泄管或ハ毛嚢ガ栓塞サレテ滯溜嚢腫ヲ生ゼルモノナリトシ、此他ニ上皮迷芽ニ依リテ生ゼル粉瘤即チ Epidermoid アリト掲ゲアリ。是レ毛嚢々腫ト粉瘤トヲ共ニ包含セシモノナリ。Gans 氏ハ粉瘤ニ偽性粉瘤ヲモ含メ、之ニ粟粒腫、面皰及ビ毛嚢々腫ヲモ編入セリ。何レモ内容ニ脂肪及ビ角質ヲ有ス。即チ粉瘤ニハ表皮嚢腫性ノモノ (Epidermoid) ト滯溜性ノモノトアリトセリ。然レドモ毛嚢々腫ト粉瘤トハ臨牀的ニ時ニ區別シ難キモノアリト雖モ別種トスルガ可ナリ。即チ毛嚢々腫ハ比較的表在性ニシテ往々ソノ表面ニ毛孔或ハ面皰ヲ有シ、或ハ壓迫ニ依リテ内容ヲ排泄スルガ如キモノニシテ粉瘤ハ之ニ反セリ。

以上粉瘤ノ成因ハ皮様嚢腫 (Dermoid) ニ類似セリ。隨テ Franke, Török, Unna, Simon, Gans 諸氏ハ粉瘤ハ簡單ナル構造ヲ有スル皮様嚢腫ナリト云ヘリ。

粉瘤ノ構造ハ前述ノ如キモ皮様嚢腫ニ於テハ壁ニ毛嚢、脂腺、汗腺、乳頭等ヲ有シ、壁ハ表皮ト同様ノ構造ヲナシ、皮膚ト連絡ナシ。加之時ニハ3胚葉性トナリテ軟骨、骨、齒等ヲ有スルモノアリ。内容ニハ角質、「ヒヨレステリン」、脂肪、毛髮等ヲ有ス。余ノ第5例モ明カニ脂肪、毛髮等ヲ證セリ。又上述ノ構造ヲ有シ毛嚢、脂腺及ビ汗腺ハ明カニ壁ニアリテ乳頭形成著明ニシテ、且壁ノ一部ハ絨毛様ニ内腔ニ突出セリ。又壁ノ一部ニハ巨大細胞多ク上皮細胞ニ代レルアリ。是レモ異物性ノモノニシテ粉瘤ニ見シモノト同一成因ニヨル。斯ル巨大細胞ハ皮様嚢腫ニ於テ Török, Kömg, 坂上諸氏モ之ヲ見タリト云フ。

皮様嚢腫モ胎生時ニ皮膚ノ小片 (即チ表皮並ニ真皮) ガ迷入シテ發生セルモノニシテ瘻孔形成ノ場所ニ多キモノナリ。即チソノ好發部位一定シ口、眼、頸部等ニ多キハ衆知ノ事實ナリ。

Török 氏ハ表皮迷芽ガ胎生ノ早期ニ起ラバ發育力旺盛ナル胚芽ナル爲複雑ナル皮様嚢腫ヲ作り、胎生後期ニ迷入セバ發育少クシテ徐々ニ増大シ簡單ナル粉瘤ヲ生ズト云ヘリ。稍々興味アル説ナリ。

Lücke, Franke 氏等ハ皮様嚢腫ハ外胚葉性ノモノナリトシ Unna 氏ハ之ニ軟骨、骨或ハ齒等ノアルハ表皮ノミニテハ説明シ得ズト云フ。蓋シ所謂皮様嚢腫ニハ2種アルモノニテ1ハ外胚葉タル皮膚ノ迷芽ニヨリテ發生シ内容及ビ壁ハ皮膚ノミヲ含メ、1ハ3胚葉性トシテ皮膚ノ外ニ骨、軟骨、ソノ他ヲ有スルモノナリ。何レモ奇形腫 (Teratom) トシテ可ナランモ、特ニ後者ハ奇形腫ノ定形的ナルモノナラン。吾人ハ後者 (特ニ内臓ノモノ) ヲ見ルコト少ク、皮様嚢腫トシテハ外胚葉性ノモノニ遭遇スルモノナリ。ソノ構造ニ就テハ茲ニ多クテ語ラズト雖モ此皮様

囊腫ト粉瘤トヲ比較セント欲ス。

先ヅ内容ハ一般ニ相似タルモ粉瘤ニハ毛髮ナク、壁ノ構造ハ表皮ノ像ニシテ一般ニ扁平ナルモ、時ニハ乳頭ノ形成アルモ毛髮或ハ脂腺ト關聯ナシ。

皮様囊腫ニハ内容ニ毛髮アリテ壁ハ複雑ニシテ毛髮、脂腺、汗腺、乳頭等夥シクシテ一見識別シ得ルモノナリ。只ソノ成因ガ互ニ相類似セル點ハ認メ得ルモノト思考シ茲ニ敢テ比較檢索セルモノナリ。

結 論

1) 粉瘤ノ壁ノ構造ハ表皮ト同様ニシテ基底層ヨリ顆粒層迄ヲ有スルモ細胞間ニ棘ハ認メ難キ事多シ。乳頭ハ認ムル事アルモ痕跡狀ニ過ギズ。

2) 尙ホ壁ハ(即チ粉瘤自身ハ)毛囊或ハ脂腺ト關係ナク外表トモ連絡ナシ。

3) 壁ノ周圍ニ巨大細胞ヲ認ムルコトアリ。或例ニ於テハ夥シキ數ニシテ1部ハ上皮細胞ニ代リテ粉瘤壁ヲナスモノアリ。コノ壁ノ周圍ノ結締織中ニ多數ノ組織球ノ浸潤アリテ、恐ラク組織球ヨリ生ゼル異物性巨大細胞ナル如シ。

4) 内容ハ一般ニ角質ヨリナリ毛髮ヲ含マズ。中ニ「ヒヨレステリン」結晶及ビ脂肪ヲ含有スルモノアリテソノ量ハ囊腫ノ新舊大小ニヨリ或程度ノ差アル如シ。

5) 粉瘤ノ位置ハ比較的深層ニアリテ毛囊々腫ハ表層(特ニ初期ニ於テ)ニ多く、壁ニ毛囊及ビ脂腺ノ有無或ハ内腔ニ毛髮ノ有無、外表トノ連絡ノ有無等ニ於テ區別シ得ルモ時ニハ連續切片ニ據ラザレバ鑑別至難ノ場合アリ。

6) 粉瘤ノ發生ハ胎生時ノ表皮迷芽ニヨルモノニシテソノ發生ハ皮様囊腫ト類似セルモ、皮様囊腫ハ壁ノ構造複雑ニシテ乳頭、脂腺、毛囊、汗腺等モ含有シ、内容ニ毛髮多數ヲ證明スルコト多シ。

擧筆ニ當リ懇篤ナル御指導ヲ賜リタル皆見教授並ニ巨大細胞ニ關シテ助言ヲ與ヘラレシ田村教授ニ深謝ノ意ヲ表ス。(3. 5. 23. 受稿)

文 獻

文獻ノ大體ハ「毛囊々腫ニ就テ」(本誌40年, 10號)ノ文獻參照。

- 1) Chiari, Arch. f. Dermat. Bd. 23, S. 984. 2) Franke, Wien. klin. Woch. S. 696, 1890. 3) König, Arch. f. klin. Chirurg. Bd. 48, S. 164. 4) 坂上, 皮膚科雜誌 第19卷, 785號. 5) Simmn, Beitr. z. klin. Chirurg. Bd. 80, S. 473

*Kurze Inhaltsangabe.***Beitrag zur Kenntnis des Atheroms.**

Von

Dr. Akira Fujiwara.

*Aus der Universitäts-Hautklinik in Okayama.**(Vorstand: Prof. Dr. Seigo Minami).*

Eingegangen am 23. Mai 1928.

In dieser Zeitschrift (Bd. 40, Nr. 10) habe ich meine Untersuchung über die Follikularzyste bereits veröffentlicht.

Hier will ich über eine Untersuchung des Atheroms (Epidermoid) berichten. Bei 4 Fällen habe ich Serienschnitte eingehend beobachtet. Dieser Tumor besteht aus den Epithelzellen wie in der äusseren Haut. Der Inhalt besteht hauptsächlich aus Hornmassen, bei altem Atherom auch aus Fett oder Cholesterinkristallen. Das Atherom hat keinen Zusammenhang mit Haarfollikel, Talgdrüse oder äusserer Haut. Es enthält auch kein Haarstück im Innern.

Man kann also Follikularzyste und Atherom histologisch wohl unterscheiden. Bei einem Atheromfall finden sich reichliche Riesenzellen in der Wand, und zwar liegen sie an einigen Stellen an der Stelle der Epithelzellen. Sie stammen wahrscheinlich aus Histiocyten als Fremdkörperriesenzellen. Sie waren auch bei einem Fall von Dermoidzyste in ähnlicher Weise zu konstatieren.

Die Keimgenese passt für Atherom und Dermoid wahrscheinlich, jedoch sind diese beiden Tumoren histologisch leicht zu unterscheiden.

